十月号　塾だより

発行
2021.9.21
編集
山口学習塾
山口将志
樋口淳一
矢田力椰

私立高校進学生に関して

第4回北辰テストの結果が返却され、私立高校の個別相談会に参加された生徒さんもいるかと思います。進路に関しても少しずつ決まってきた受験生もいるでしょう。

山口学習塾は公立高校受験をメインとした学習塾ですが、毎年、私立高校に進学していく生徒さんもいらっしゃいます。埼玉県では私立高校入試が公立高校入試よりも1ヵ月ほど早く終了します。毎年残り一か月の私立高校進学生の勉強や、進学後のお話をいただきますので本年度からは以下のように対応させていただきたいと思います。

＜卒業生の扱い＞
2月末まで塾に在籍した生徒さんを卒業生とさせていただきます。高校進学後の自習室の利用などは卒業生に限らせていただきます。

＜2月授業に関して＞
私立高校進学が決まった生徒さんに関しては、2月は公立高校受験予定者とは別に高校進学のための特別講座を実施する予定（数学、英語）です。指導の内容や授業日数、お月謝に関しては決まり次第お知らせいたします。

今月号のトピックス

- 私立高校進学生に関して
- 志望校を下げないという選択
- 本の紹介コーナー
- 「学校が嫌い」という長女を通して思うこと。

「学校が嫌い」という長女を通して思うこと。

私事になりますが、長女が今年から小学1年生になり、小学校に通い始めています。彼女は幼稚園の時から一人遊びが好きで友達と遊ぶというのが少し苦手なところがあるようです。そんな彼女が夏休み明けの登校初日、やはり「学校に行くのが嫌だ。」「ママと一緒がいい。」とぐずりました。

私自身も思い返せば、小学校、中学校、高校とあまり学校が好きではありませんでした。友達が多い方ではありませんでしたので（クラスに一人も友達がいないときもありました）、彼女の気持ちが少し分かるような気がするのです。そんな彼女に「じゃあ学校休むか？いいぞ、無理しないで。」と声をかけるのですが、果たしてそれが正しいのかどうか、今も悩む時があります。（彼女はそう言われても首を横に振って学校には通い続けています。二学期が始まり少し経ってだいぶ落ち着いて通うようになりました。）

彼女の話を聞くと、「誰も話す人がいない。」「誰も遊ぶ人がいない。」というのが、学校がつまらない大きな理由のようです。いじめにあっているという訳でもなし、勉強が分からないという訳でもなし、でも、休み時間やふとした瞬間に周りが楽しそうに話をしている中、自分が一人…というのが嫌なようです。

彼女の話を聞いていて、自分の仕事のことを考えます。果たして塾で長女のように感じてしまっている生徒はいないだろうか。もちろん、塾は勉強をしに行くところで遊びに行くわけではありません。そして、いろんな小学校、中学校から生徒が集まってきますので、「誰も知り合いがいない」というのも珍しくありません。「遊びに行くわけでもないし、学校も違うし、誰も話す人がいないのが当たり前」と割り切ってくれている生徒さんもいることでしょう。

でも、私の長女のように「誰も話す人がいなくてつまらない」という気持ちで通うよりは、「先生たちがちょっとしたときに声をかけてくれる」という気持ちが少しあるだけで、勉強に対しての意欲が変わるのではないか、と思う部分もあります。

我々の仕事は学習指導ではありますが、そんなところにも気を付けていかないとな…、と長女を見て思いました。（山口）

志望校を下げるにはまだ早い！

今山口学習塾に通っている生徒さんの中には、「1年と2年の内申から考えて、志望校への合格は難しいな…。志望校下げちゃおうかな…。」と思っている人もいるのかもしれません。私もそう思って志望校を下げようと両親に相談したときがありました。もともと志望していたところから2ランクくらい下の高校です。2ランク下の高校ですら、内申点は基準値に達していませんでした。第一志望の合格は絶対に無理と決めつけて両親に相談を持ち掛けたのですが、両親は「北辰の偏差値も上がってるし、もったいない」と認めてくれませんでした。私は納得できなくて、「じゃあ次の通知表で40取れなかったら志望校下げるよ」と言いました。両親は納得していない様子でしたが、ひとまずはうなずいてくれました。第一志望校に合格するのは「現実的に厳しい」とは思っていたとはいえ、できれば合格したいのは事実。それからは、内申40を取るために一生懸命勉強しました。その後は北辰の偏差値も順調に上がっていき、内申も40を超えたので、志望校を下げたいとは思わなくなりました。

高校受験を通して、ただ１つだけ、今でも鮮明に覚えていることがあります。それは、第一志望校の合格者一覧表に自分の番号があったと伝えたときの、母の泣き崩れる姿です。私の努力をそばで見てきて、その努力が実を結んだことに感動したのだと思います。自分の努力でそこまで人を感動させたのは、後にも先にもその1回だけです。諦めずに頑張ってよかったなと、心から思います。

もし両親に志望校を下げる相談を持ち掛けたときにYesと言われていたら、成績を上げるためにそこまで努力することはなく、両親にそんな感動を与えることもなかったでしょう。それどころか、逃げ癖がついて、2ランク下の高校にすら合格できなかったかもしれません。

目標が高く不安になることも多いでしょうが、自分には無理だ…と決めつけるにはまだ早いです。志望校を下げるのは入試直前でも大丈夫です。今は「目標に近づくには何をしたらいいのか」を考えるようにしましょう。例えば私の場合は、1・2年の内申の不利を挽回するには3年の内申40が必要→「内申40取るために何をすればいい？」→①テストで450点以上取る ②すべての提出物を最高評価で出す ③授業中は積極的に挙手をする、といった感じでした。皆さんも一度、「自分のやるべきこと」を考えてみるといいかもしれません。（矢田）

本の紹介コーナー
サイモン・シン『フェルマーの最終定理』

今回は数学に関する本のお話です。六月号に掲載した問題の答えも後ほど記しておきます。

突然ですがみなさん、「フェルマーの最終定理」を知っていますか？都合により定理そのものは省略させていただきます。興味のある方はちょっと調べてみてください。三平方の定理の知識があればなんとなくわかると思います。

この定理はその名の通り、フェルマーという十七世紀の偉大な数学者が書き残したものです。彼は数学の着想を紙の余白に書き残すという習慣を持っていました。フェルマーの最終定理も彼が余白に書き残したものの一つですが、その証明に関して「真に驚くべき証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる」と遺しています。ちょっとかっこいいフレーズですよね。いつか使ってみたいものです。

結局、彼は定理の証明を記さずに亡くなってしまいます。それが悲劇の始まりでした。何人もの数学者が最終定理に挑み、頭を悩ませ、失敗する、といったことがいくどとなく繰り返されました。最終的に正しいと証明されたのが1995年のこと。およそ300年の間、誰も一つの定理を証明できなかったことになります。定理の内容を知らなくとも、300年という年数からその難しさが推し量れるのではないでしょうか。

サイモン・シンという方が著した『フェルマーの最終定理』という本では、紀元前から続く数学者の営為と、フェルマーの最終定理に挑戦する数学者の苦闘が描かれています。たった一つの問題に苦悩する数学者たちの営みとその功績は、まさに人間の知恵や思考能力の結晶だと言えるでしょう。数学の知識がなくとも読める内容になっていますので、数学に苦手意識がある方も、ぜひお手に取ってみてはいかがでしょうか。きっと世界が広がると思います。

六月号では「1から10の数を2グループに分け、グループの数字をすべてかけたとき、その積が等しくなることはあるか」という問題を紹介しました。解けましたでしょうか？

この問題の答えは単純で「7があるから積が等しくなることはない」が解答です。なぜこの答えになるのか、詳しい説明をしたいのですが、残念ながらこの余白はそれを書くには少し狭すぎますね。（大崎）